観光地化にともなう山岳宗教集落戸隠の変貌（第2報）

岩　鼻　通　明
（教養部　地理学研究室）

はじめに

集落地理学において，国勢調査等の統計を利用した時系列的変化に関する研究は都市地理学の分野で多く行なわれてきた。

一方，村落地理学においては世界農林業センサス等を利用した村落間のマクロな研究は行なわれても，特定の村落を対象としたミクロな時系列的変化を追及する調査研究はさほど試みられていなかった。

近年，ミクロな村落研究の増加が指摘されてはいるが[1]，継続的に時系列的変化の調査が行なわれた村落研究は意外に乏しい。

筆者は先に長野県上水内郡戸隠村中社集落を調査対象事例とした論文を発表したが[2]，この拙稿は，1965年に信濃毎日新聞社の実施した戸隠総合学術調査における中社集落の調査の成果を受けて，筆者が1975年に中社集落の戸別の聞き取り調査を行なった結果から，この十年間の変化を考察したものである。

さらに，筆者は1985年に再び中社集落の戸別の聞き取り調査を実施して，1975年から1985年の十年間の集落変化についてのデータの収集を行なった。

その成果の一部は既に報告しているが[3]，本論文は1975年から1985年までの中社集落の変化に関する全体的なとりまとめとしての報告であり，中社集落の時系列的変化についての第2報となるべきものである。

1．戸隠観光の十年間の動向

まず，戸隠におけるこの十年間の観光面の動向について，概観したい。

戸隠は元来，戸隠三社（奥社・中社・宝光社）を中心とする宗教観光地であったが，高冷地のため，夏の避暑地として，また，登山・キャンプの拠点とし

ても観光客が訪れるようになり，県営有料道路「戸隠バードライン」の開通やスキー場の開発もあって冬場も観光客を集める通年観光地に成長した。

さて，1975年から1985年までの十年間は1973年と1979年の二度のオイルショックにともない，高度経済成長が曲がり角にさしかかった経済不況の時期であり，それまで順調に伸びてきた戸隠の観光も停滞期を迎えることとなった。

戸隠を訪れた観光客数は1973年をピークに漸減傾向にあったが(4)，この低迷状況は1981年を底として上昇に転じた(5)。

ところが，この回復しつつあった戸隠の観光に大きな打撃を与えたのが，1985年７月に発生した長野市の地附山地すべりである。

この地すべり災害は，麓の老人ホームや住宅団地を押し潰して多くの被害者を出したことで記憶に新しいが，前述の「戸隠バードライン」がこの災害で現在なお一部不通となっており，一時間足らずで善光寺から戸隠へ至るこの道路が地すべりで寸断された影響は多大のものがあった。

戸隠高原そのものは地すべり災害の被害は皆無であり，迂回路も確保されていたにもかかわらず，ちょうど夏休みに入った直後の災害であり，マスコミで大々的に報道されたため，観光客に与えた心理的影響のマイナス面は大きく，宿泊のキャンセルが相次ぐ騒ぎとなって，この1985年の戸隠の観光客数は1981年をも下回る結果に終わっている。

なお，この災害が戸隠観光に与えた影響の実態の詳細については，災害発生がちょうど筆者の調査中であったため，今後の課題としたい。

2.　中社集落における観光地化の展開

中社集落は戸隠神社三社（奥社・中社・宝光社―図１参照）の中で，戸隠神社社務所や旧別当所の存在する門前町であり，旅館・民宿・飲食店・土産物店等の観光施設が数多く存在する戸隠観光の中心地である。

中社集落の旅館は元来，神職（社中）が経営する宿坊であったが，近年は信者である戸隠講の講員以外に多くの観光客を宿泊させ，また飲食店や土産物店を併設する等の多角経営化が進んでいる。

一方，社中に対して，在家と称される農業や竹細工業を営んでいた世帯は，高度経済成長期に急速に民宿化が進展した。

これらの中社集落の観光地化の進展は，1963年の村営スキー場と1964年の有

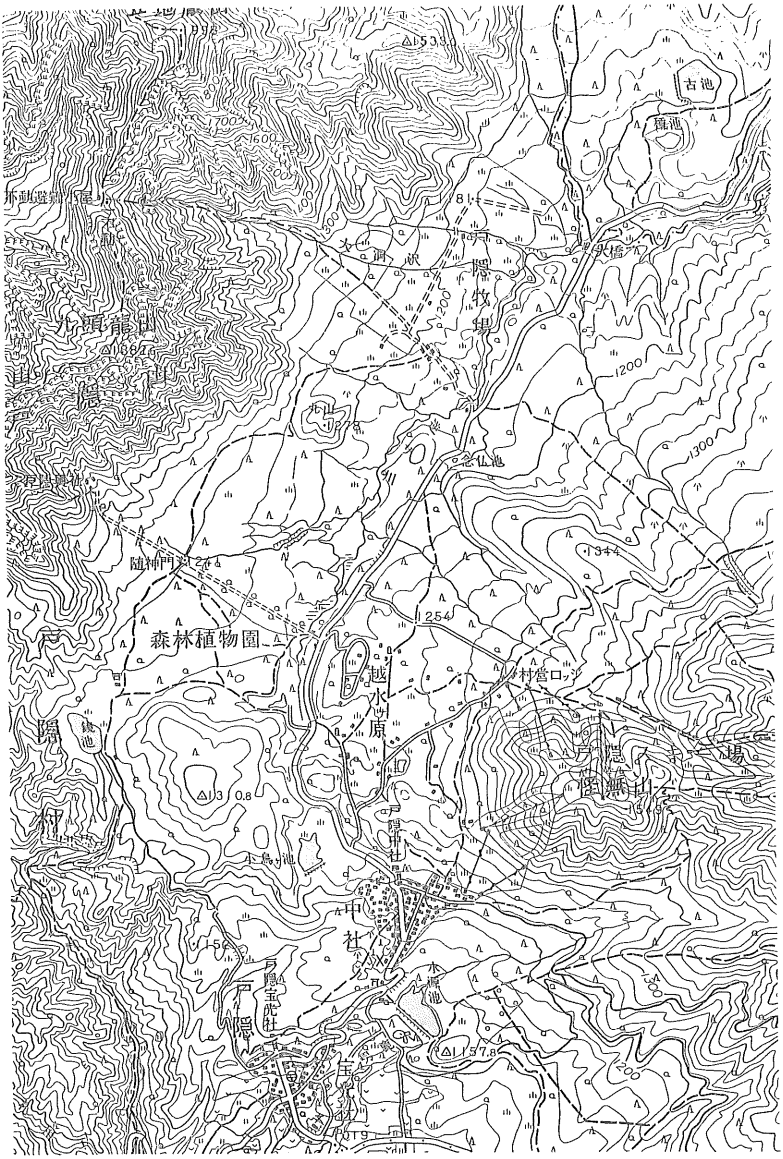

図1　戸隠付近の地形図
（国土地理院５万分の１地形図「戸隠」昭和56年修正より）

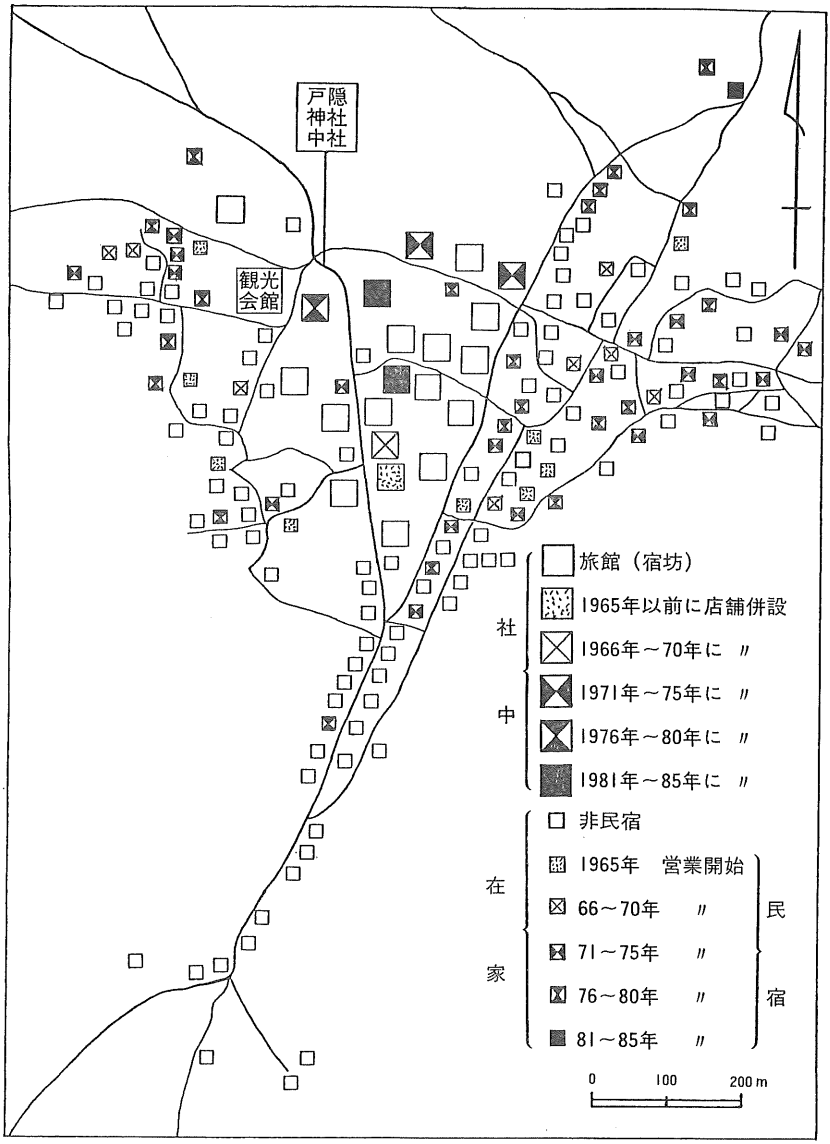

図２　中社における旅館・民宿の分布

料道路「戸隠バードライン」，1968年の森林植物園，1970年の国営スキー場の開設等の観光開発からの影響が大きいことを既に指摘した[6]。

さて，中社集落における1975年から1985年の十年間の観光地化の展開について検討したい。

まず，オイルショックまでは急増の一途をたどった民宿が，1975年以降は増加に歯止めがかかった（図２）。1975年から80年の間に営業を開始した民宿は数の上ではかなり存在するが，大多数は75,6年の開業であり，いわばオイルショックの以前から開業準備を進めていたものとみることができる。

観光客数が最低を記録した1981年から85年までの間に開業した民宿はわずか１軒にすぎない。

ただ，この十年間に開業した民宿については，集落の北東の外縁部に外来者による経営や企業の保養所といった従来にない宿泊施設（いずれも中社の民宿組合には属していないが，図２では便宜上，民宿に含めた）が立地しはじめたという質的変化がみられる。

聞き取りによれば，民宿の増加と観光客の減少から，民宿一軒当たりの宿泊客はほぼ半減したといい，満室となるのは年末年始のスキーシーズン程度であるとのことであった。

そのため，民宿経営の中核であった主婦層が，民宿開業資金返済のために中社集落内の飲食店や土産物店などで繁忙期のパート・アルバイト労働に従事するという，十年前にはあまりみられなかった例を多く耳にした（かつては，むしろ非民宿世帯からの従事者が多かった）。

一方，宿坊を営む社中は，かつてよりは多角経営化に積極的になったといえる。とりわけ，観光客の往来の激しい大門通りと横大門通りに面する宿坊は，飲食店や土産物店を併設する例が増加し，21軒中７軒にのぼっている（図2）。

従来は，大門通り沿いに立地する土産物店は，社中から借地した在家の人々が出店を経営するものがすべてであったが，この十年間に，土産物店を敷地内に併設する社中が現れはじめた。

ただ，これらの多角経営化は，かつては離村せざるをえなかった社中の次男三男層の雇用の場となっている例が多くみられる。

戸隠信仰を支えてきた戸隠講の拡大に多くを期待できない昨今の状況では[7]，［社中が多角経営化を指向することはやむを得ないであろうが，観光地としての発展のためにも戸隠の宗教集落を形成している宿坊の建築物群の伝統的

景観の保全には注目する必要があろう。

筆者の観察によれば，1985年7月現在の中社集落におけるカヤ葺き屋根の民家は25軒程度にすぎないが，カヤ葺き屋根にトタンをかぶせた民家もほぼ同数存在するので，カヤ葺き屋根の景観の保全を進めることは不可能とはいえない。

さて，オイルショック以降，宿泊客はかなり減少したが，日帰り観光客，とりわけマイカー利用の日帰り客はさほど減少してはいない。

そのため，これらの日帰り客を対象とした飲食店・土産物店は，むしろ増加傾向にあり（図3），店舗の改装等にも積極的である。

また，かつての戸隠はソバ屋がほとんどであったが，アフタースキー等の需要からスナック・喫茶店といった従来は存在しなかった業種の開業もみられ，飲食店間の多様化が進んできたのが，この十年間の特徴である。

その一方で，経営不振から休業・廃業する飲食店が散見するようになったのも，かつてない現象であった（図3）。

立地条件からみれば，中社の門前や，観光会館の横手などの観光客の多く集まる場所で，駐車場を確保した施設が増加しており，逆に中社集落北東の国営スキー場（経営不振で閉鎖が検討されたこともあった）付近や，集落南部の観光客の少ない場所では，休廃業した例がみられる。

ところで，在家の伝統的職業である竹細工業については，主業とする世帯は1975年の14戸から1985年は5戸に減少したものの，兼業として従事している世帯は36戸から50戸を上回る数に増加しており，全体としては1965年からの十年間に大きく減少したような顕著な変化はこの十年間にはみられない（図4）。

竹細工業の分布は，民宿の分布（図2）と重なる傾向が強く，過剰ともいえるほど増加した民宿世帯においては，前述の主婦層のパート労働と並んで，男性，とりわけ高齢者の労働として，在宅兼業の可能な竹細工業が生計を支える重要な基盤となっていることがうかがわれる。なお，その一方で若年層は戸隠村内に立地した先端産業の工場や長野市へ通勤する例が増加している。

また，飯綱・黒姫山麓に自生する根曲り竹（チシマザサ）を材料とする竹細工を戸隠における伝統工芸として評価し，後継者の育成を図ろうとする気運が徐々にではあるが高まりつつある。

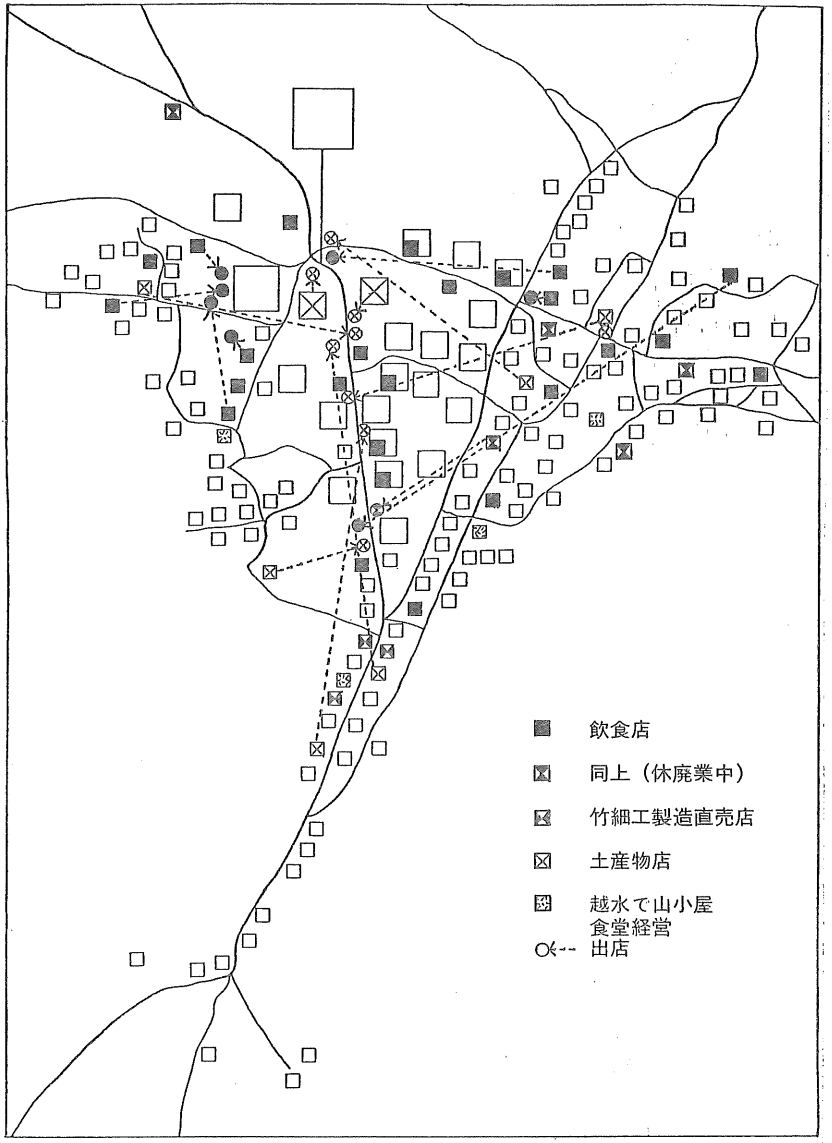

図３　中社における飲食店・土産物店の分布

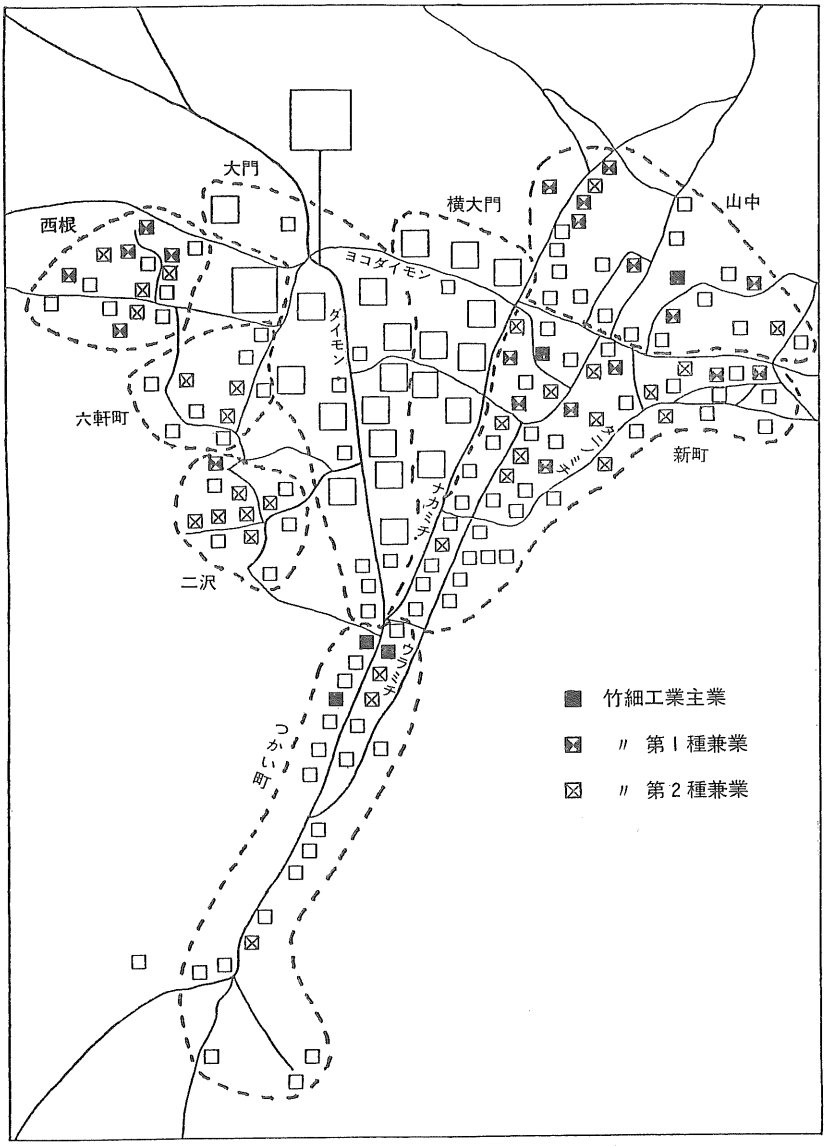

図４　中社における竹細工業の分布と小地域集団

3. 中社集落の社会集団

中社集落の内部には，前述の社中と在家という二つの社会集団の外にも，数多くの講集団などの社会集団が存在する。

これらの社会集団の概略については既に報告したが[8]，中社集落の観光地化の過程においては，これらの社会集団が媒介項としての役割を果たしていると想定されるため，民宿や飲食店・土産物店の分布パターンと，これらの社会集団の空間的分布との関連性を検討したい。

まず，社中と在家とが共に同じ講に所属する唯一の集団として，「党」あるいは「契約仲間」と称されるものがある。この党は中社に11組あり，それぞれ十戸前後の世帯で構成されている。（図５）。

各組の分布は集落内に拡散するように点在しており，この集団が社中と在家の二つの社会集団を結び付け，集落の連帯意識を高めるために創設されたといわれていることから，あえて地縁・血縁関係を避けたのかもしれない。

また，11組のうち３組には社中が入っていないが，これらは在家の分家によって構成された比較的新しい集団と考えられ，古い集団に比べると，若干地縁的な分布になっている傾向がみえる。

かつては中社集落の全戸がいずれかの党に属していたが，最近の新しい分家は党に入っていない世帯も多くなってきている。それでも，子供が大きくなれば入りたいという希望はかなり聞くことができ，住民の間では依然として重要な集団と認識されていることが知られる。

この党の講の集会は年２回開かれ，２月９日は山の神講，11月20日はエビス講と呼ばれる。それ以外にも，この集団は葬儀の際に一切を協力して行なう葬送集団としての役割も備えていたが，80年代に入って土葬から火葬に転換したため，この機能はかなり弱まるに至った。

さて，社中のみの講として，大神講と飯綱講の二つがある。大神講は春と秋に一回ずつ行なわれるが，中社の社中には，近世から中社に宿坊を構えていた13戸に対して，明治の神仏分離後，奥社から中社に移転（近世から中社に里坊は存在した）してきた８戸とがあり，この二つの集団で別々に大神講が行なわれている。

また，旧中社の13戸の社中は６月に飯綱講を行なっている（図８）。中社からは飯綱山への登山道が延びており，かつては飯綱信仰との関係が深かったこと

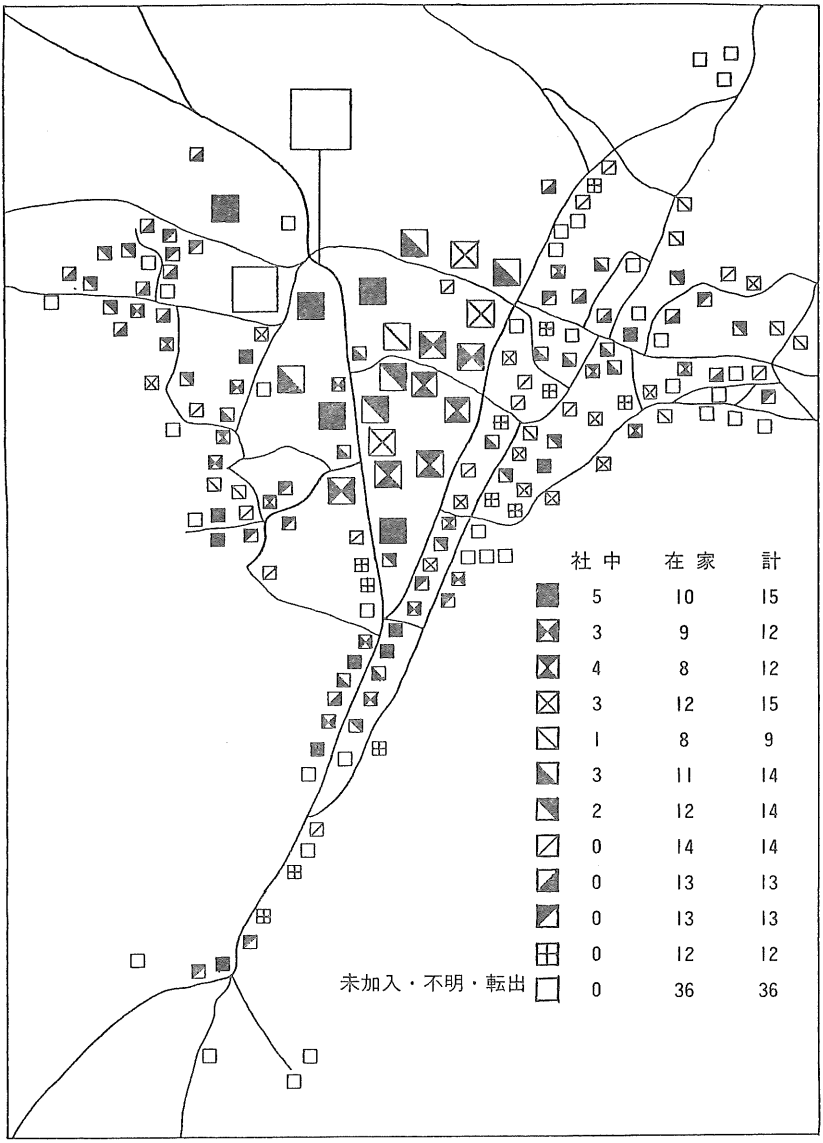

図５　中社における契約仲間の分布

をうかがわせる[9]。

旧中社の社中は大門通り，ないしは横大門通りに面して屋敷を構えており，前述の飲食店・土産物店を併設している宿坊７軒（図２）は，すべて旧中社の社中である。

やや奥まった場所に屋敷を構える旧奥社の社中は，確かに立地条件では劣るが，この二つの集団の間では，観光開発に対する認識の相違があるのかもしれない。

一方，在家のみで構成される民間信仰関係の講集団は数多く存在する。

まず，宣澄講（図６）は，中世の戸隠中興の祖といわれ，対立する真言系によって暗殺された宣澄の慰霊のための講で，８月16日に宣澄踊りが講員によって催される。

宣澄の墓は中社北東の怪無山頂にあるが，中社境内の五斎神社に宣澄社が合祀されている（図６）。

聞き取りによれば，宣澄講の講員は50戸を越え，最大規模の講となっており，講員は集落全域に広く分布している。

次に大きい講として，足神講（図６）がある。この講には50戸近い在家の人々が加入している。この足神は戸隠の鬼女紅葉伝説と関わりが深く，紅葉の部下の「おまん」の墓と伝えられる小祠が中社集落の北西部に存在する（図６）。「おまん」は健脚の持ち主であったといわれることから，足の悪い人や子供の足がじょうぶになるようにとお参りする習慣がみられる。

この足神講の講員の分布は，かなり地縁的傾向がみられ，足神社に近い西根・六軒町・二沢地区（図４）に集中している。

前述の社中の飯綱講とは別に，在家の人々によって構成されている飯綱講（図６）も存在する。この講も比較的大規模で，足神・宣澄講と同じくらいの50戸近くが入っている。６月６日が講の日で，６人の当番が飯綱山に登って山頂の飯綱社に参拝する。当番以外の講員も大勢登拝するとのことである。

この飯綱講の講員の分布も，足神講同様，地縁的傾向がみられ，飯綱山の登山口がある集落北東部の山中・新町地区（図４）に集中している。

さて，外来神を祀る講として秋葉講（図６）がある。静岡県の秋葉山三尺坊は火伏せの神として知られているが，この三尺坊の出身は戸隠宝光社の社中である岸本家とする説が有力である。ただ，中社の秋葉講と中世の修験である三尺坊とがどのような関係にあるのは不明である。

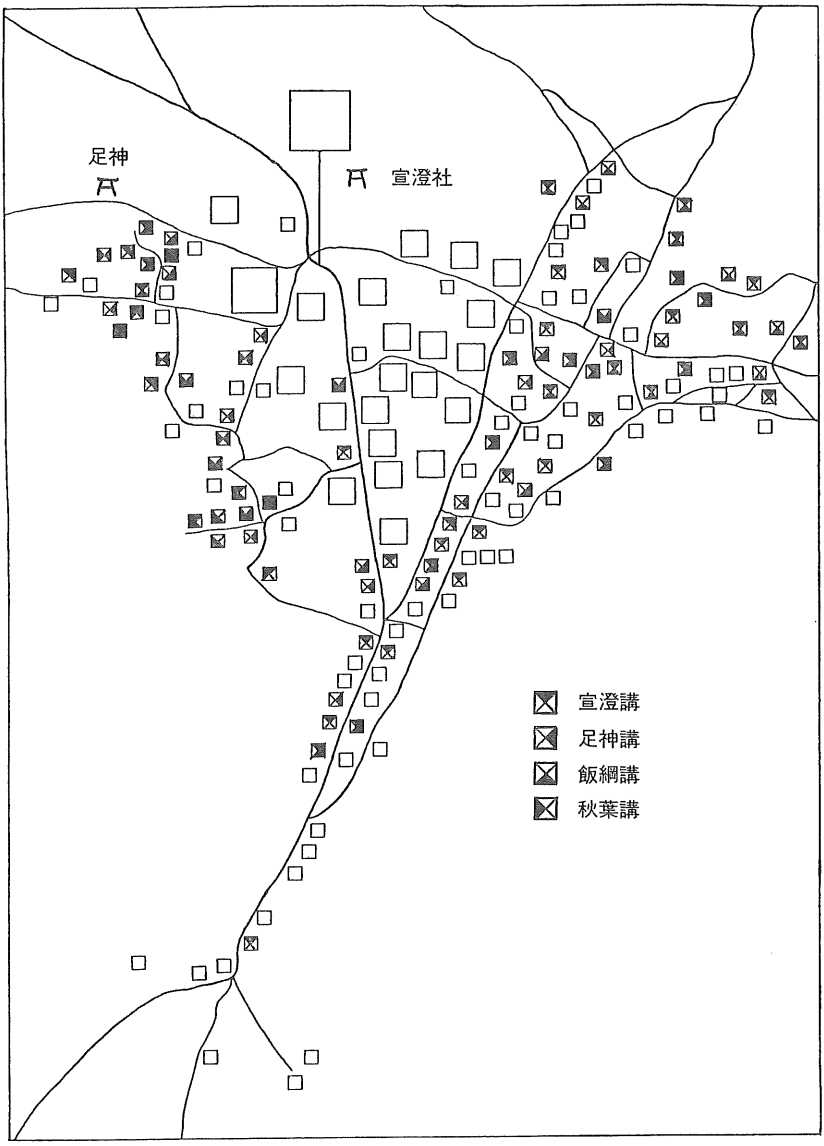

図６　中社における講集団（その１）

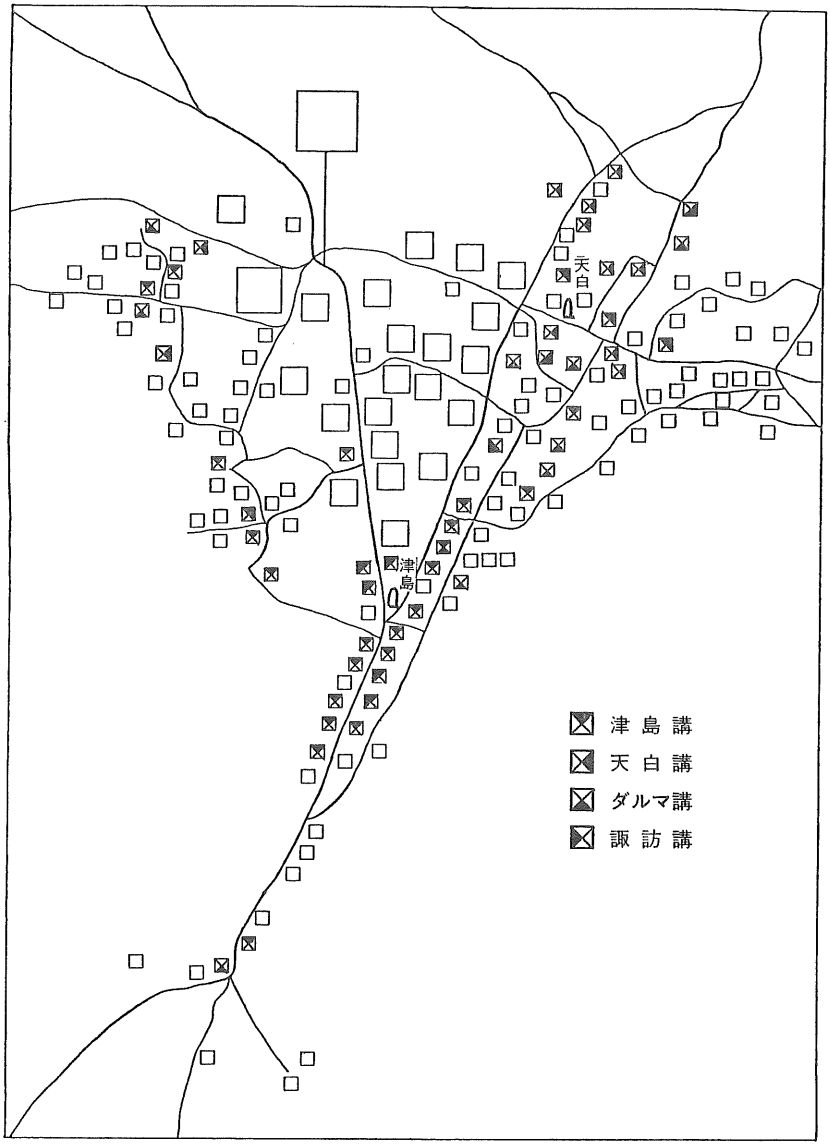

図７　中社における講集団（その２）

この秋葉講の講員は20軒足らずであるが，かつては40軒近かったといい，毎月15日に回り当番で講の集まりを開いたという。しかし，最近は講の神主を勤める社中の神原家で4月15日に講を開くようになっている。

この秋葉講の講員の分布もまた，地縁的傾向が強く，神原家に近い集落北東部の二沢・六軒町・西根地区に多くみられる。

同じく外来神の講として，津島講（図7）がある。この講は，元来は愛知県の津島神社への代参講であったと思われるが，現在は代参は行なわれていない。7月15日に講の集会が開かれ，集落の中央部にある公会堂に集まる。公会堂の前には納経供養塔が建ち，その中にお札が納めてあるという。

昔は子供の講で，学問の神として祀られ，おこもりなども行なわれていたが，今は大人の講となっている。講員は30軒ほどで，講員の分布は公会堂付近に集中している地縁的なものとなっている。

次に，村人からオテンバクサマと呼ばれている天白講（図7）がある。この講の本尊は集落北東部の山中地区にある石仏で，明和8年（1771）の年号が刻まれている。

この天白とは戸隠と飯綱の連絡役をする天狗であるという。講員は15軒ほどで，山中地区に集中しており，以前はお盆の8月13日に講を開いていたが，近頃は9月1日に開くという。

津島講と同じ7月15日に講が開かれるものとして，ダルマ様の講（図7）がある。講日が同じなので，それぞれの講員はほとんど重なっていない。

このダルマ講の本尊は，戸隠牧場近くの念仏池付近にあり，講日にはこの石仏の掃除をした後，ダルマ様の掛軸を拝して直会をするという。講員は10軒ほどの小規模な講で，講員も集落内に点在している。

同じく小規模な講として，諏訪講（図7）がある。講員は大門地区の南部とつかい町地区の北部の数軒に限られており，大門通りに沿う土産物店や飲食店などの商家で構成されている職制集団的色彩が強い。現在も毎月10日に集まり，回り当番で掛軸を拝して，お諏訪様を祀るという。

最後に，中社集落には稲荷を祀る講が三つ存在するので，それらについて触れたい。

まず，集落北東端に位置する大出イナリ講（図8）がある。大出というのは近世に別当家の家老であった家で，その屋敷跡にイナリを勧請したといい，赤い鳥居と小祠が祀られている。講員は30軒余りで8月24日に集まるが，その分

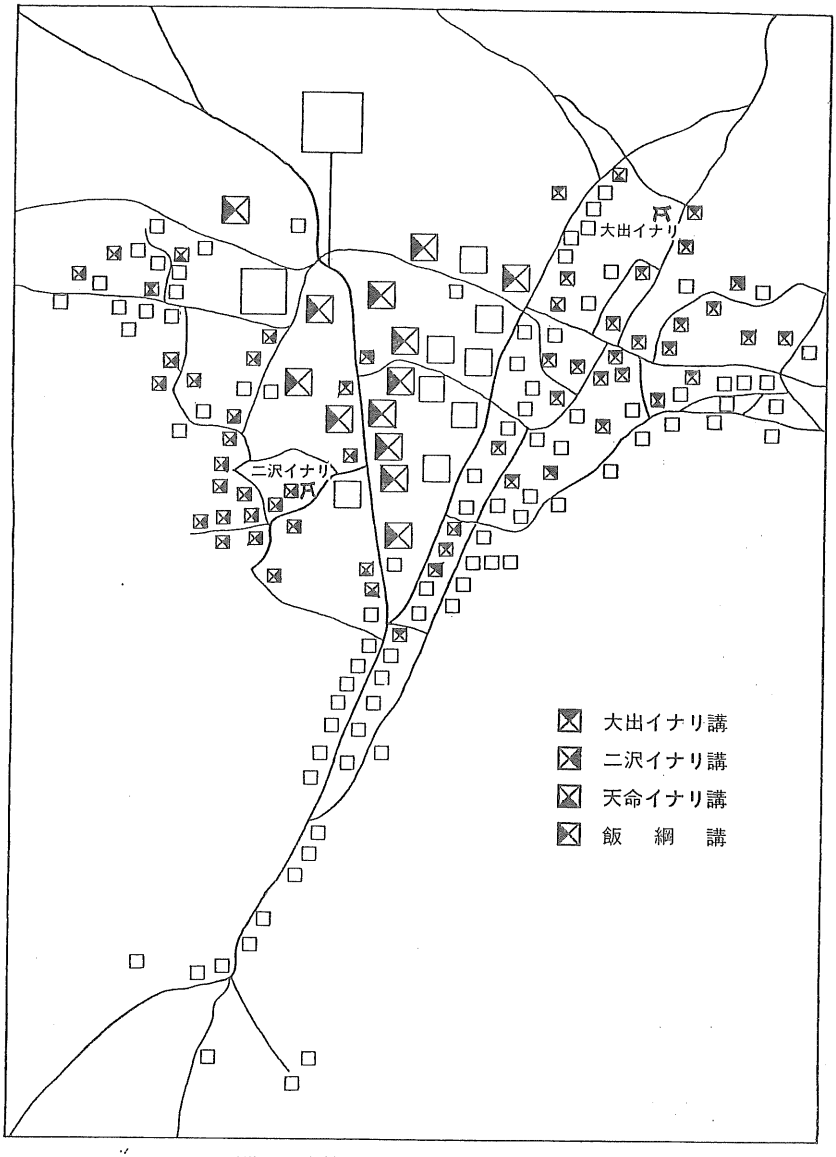

図８　中社における講集団（その３）

布はやはり地縁的で，近辺の山中・新町地区にほとんどが集中している。

次に，二沢イナリ講（図８）がある。このイナリは奥田イナリとも呼ばれ，中社集落の南西部の二沢地区に赤い鳥居と小祠がある。４月28日に社中の神原氏に神主を頼んでお祭りを開く。講員は30軒近くで，大出イナリと同様に地縁的分布を示しており，イナリの近辺の二沢・六軒町地区に集まっている。

さらに，天命イナリ講（図８）が存在する。この講は奥社脇の森林植物園の奥にある「戸隠天命稲荷社」に参拝する講である。この神社は1967年に姫野公明尼によって建立された。中世末に天台系と真言系が争った供養のために建てられたといい，６月15日に慰霊祭が行なわれる。

中社集落の在家十数軒が講に加入しており，講員は集落内に点在している。姫野公明尼が戦時中に開いた越水原の公明院に分祠が祀られている。ただ，公明尼が亡くなってから時間が経つにつれて講員は減少してきているようで，お年寄りがほとんどになっている。

以上，中社集落に存在するさまざまな講集団について述べたが，党と全集落的に信仰を集めている宣澄講を除いて，かなり地縁的な分布を示しており，図４に示した集落内部の小地域集団との関連が密接なことをうかがわせる。

また，新しい分家はこれらの講集団にはあまり加入していない場合が多く，これらの講の会合の場で，民宿の開業等の観光地化への対応も話し合われたことが想定される。

また，行政上の伝達組織として，21組からなる「ゴチョウ組」と称される隣組が存在するが，民宿の分布（図２）は隣接していくつかの民宿が存在する分布パターンが顕著にみられることから，この隣組をはじめとする諸々の社会集団の内部で，誘い合って民宿を開業するといった傾向の存在することが想定される。

4.　中社集落の空間構造

以上の中社集落における社会集団の検討から，最後に中社集落の空間構造を考察したい。

まず，戸隠神社中社が集落の最上部に位置し，その門前に神社に奉仕する社中が居住する。この地域が中社集落の中核部といえよう。

社中のうちでも，近世から中社に居を構える社中は中心に分布し，その周辺

を明治の神仏分離時に奥社から移住した社中が取り巻くという構造がみられる。

それに対して，在家は集落の周辺部に社中を取り囲むように分布している。たとえば大門通り沿いは，かつて存在した仁王門が社中と在家の居住地区の境界となっていた。神社よりも北（上）には在家は存在しないので，在家の居住地区は，集落の東部（右），西部（左），南部（下）に大きく分けられる。

前述の中社集落内部にみられる様々な講集団の分布は，ある程度，この区分に対応する。

たとえば，在家の飯綱講・大出イナリ講・天白講は東部に，足神講，二沢イナリ講は西部に，諏訪講・津島講は南部に講員の多くが分布しており，ダルマ講と天明イナリ講は集落の北半分に講員が多くみられる。

さらに，これらの講集団の分布は中社集落のムラ境，ないしは戸隠の聖域の境界との対応関係がみられる。

中世の縁起書である，長禄２年（1458）に成立した『戸隠山顕光寺流記』によれば，戸隠の聖域の境界について「当山四至堺ノコト　東ハ飯縄山鳴岩ヲ限リ　南ハ仁和坂本郷ノ峯ヲ　西ハ大峯二本杉ヲ　北ハ黒姫境宮ヲ限ル」という記載がみられる[10]。集落東部で祀られる飯綱講は，戸隠の東の境界の神であり，西部で祀られる足神講は，南（現実には西南）の境界と想定される鬼女紅葉伝説で知られる荒倉山に関わる神であった。これらの境界神がその境界を望む地区で信仰されるに至ったのであろう。

また，集落南部（下）で信仰のみられる諏訪講と津島講はいずれも外来神であり，参詣路に沿って入って来た神々が集落の入り口付近で信仰を集めたのであろう。なお，集落の南端部には道祖神も祀られている。

一方，ダルマ講と天明イナリ講は中社と奥社の境界付近に祀られる神であり，中社の北境の神とみれば，集落の北部に講員が多くみられることと対応する。

このように，中社集落の各地区で信仰を集めている講集団の祭神の多くは，集落ないし聖域の境界に関わる神でもあることが想定され，それぞれの地区が接する境の神を祀っているとみることができよう。

以上，中社集落は集落の上に戸隠神社中社，中央に社中の宿坊，その左右と下に在家が居住するという空間構造をなしていることが指摘される。

おわりに

以上，1975年から1985年までの十年間における中社集落の変化について，可能な限り図示することによって検討を試みた。

オイルショックまでは順調に伸びてきた戸隠観光が停滞期を迎えたのが，この十年間であったと結論づけることができよう。

それまでは，宿泊施設の増加が著しかったが，オイルショック以降はほとんどが新規開業はみられなくなり，改築・増築もあまり行なわれなくなった。

一方，年間70万台にのぼる自動車の利用がみられた「戸隠バードライン」で訪れる日帰り観光は相変わらず活発であったため，ソバ屋等の飲食店や土産物店はこの十年間も増加傾向にあり，社中の進出もみられた。

ただし，立地条件に恵まれない飲食店の中には，季節営業になったり，休業から廃業に至る店も散見するようになったことがこの十年間の特徴といえよう。

観光客数がやや回復に向かった時期に発生したバードラインの不通は，観光地としての戸隠にとって大きな痛手であった。

ただ，戸隠の積極的なＰＲ活動と，その後の好景気に恵まれたため，順調すぎるほどに戸隠の観光は息を吹き返したようであるが，その詳細な分析は改めて調査検討したい。

また，最近のバブル経済の破綻による影響や，いわゆるリゾート法制定以後の各地の観光開発が戸隠に与える影響，さらには1998年に開催される長野五輪と，それにともなう高速道路や新幹線等の高速交通網の整備が及ぼす戸隠への影響といった複雑な問題が戸隠観光の前に横たわっている。

戸隠高原の豊かな自然環境と，宗教集落の町並み景観を保全しながら，これらの問題にどのように対応していくべきかは，今後の戸隠観光にとって重要な課題となる。

本稿は，その方向性を示すまでには至っていないが，その参考資料のひとつとなれば幸いである。

【付記】

本稿は，筆者の卒業論文の題材となった1975年の戸隠村中社集落の現地調査を，継続・補完するために，1985年夏に実施した中社集落の現地調査の成果を

まとめたものである。

本稿の骨子は，1985年９月に開催された東北地理学会秋季学術大会（於：山形大学教養部）において口頭発表した（発表要旨は『東北地理』38―１，1986年３月，に掲載）。

現地調査の際にたいへんお世話をいただいた松井憲幸戸隠神社宮司をはじめとする中社集落住民の皆様，および戸隠村役場，戸隠村商工会の各位に感謝申し上げるとともに，諸般の事情によって成文化が大幅に遅れたことを謹んでおわび申し上げます。

注

(1) 浮田典良編『日本の農山漁村とその変容』大明堂，1989年６月。

(2) 拙稿「観光地化にともなう山岳宗教集落戸隠の変貌」『人文地理』33―５，1981年10月。

(3) 拙稿「戸隠中社の講集団」『あしなか』195，1986年１月。
拙稿「講の機能と村落社会」戸川安章編『仏教民俗学大系７　寺と地域社会』名著出版，1992年８月。

(4) 前掲注(2)参照。

(5) むらおこし事業実行委員会『むらおこし事業報告』戸隠村商工会，1988年３月。

(6) 前掲注(2)参照。

(7) 戸隠信仰と，その民俗については前掲注(2)および拙稿「戸隠信仰の地域的展開」『山岳修験』10，1992年10月，参照。

(8) 前掲注(3)参照。

(9) 拙稿「善光寺参詣曼荼羅の周辺―善光寺・戸隠信仰と“まいりの仏”」『月刊百科』323，1989年９月。
高橋平明「中世末の飯縄修験と飯縄権現像」『山岳修験』９，1992年１月。

(10) 『信濃史料　第８巻』1957年，所収。

（1992年８月31日受理）

山形大学紀要（社会科学）第23巻第２号

Changing Recreational Activities in *Togakushi*, A Mountain Village founded by *Yamabushi* (second paper)

by Michiaki Iwahana

(Section of Geography, Faculty of General Education)

The aim of this paper is to clarify the change of a mountain village by recreational activities from 1975 to 1985.

The outline of this paper is as follows.

1. My reseach area is *Chusha* settlement in *Togakushi* Village in *Nagano* Prefecture.
2. For decrease of travelers after the Oil-Shock, hotels don't increase.
3. For increase of daily trips by car, restaurants increase.
4. A disaster of the main road from *Nagano* city to *Togakushi* village in 1985 give influences to recreational activities.
5. There are a lot of social groups in *Chusha* settlement.